

そこにあるもの、そこにはないもの

What is there, what is not there

建築家

小林一行 + 檜村芙実 / TERRAIN architects インタビュー

Ikko Kobayashi + Fumi Kashimura / architect

構想した建築を実現するためには、様々な人の考えや敷地の条件とぶつかりながら、それらを紡いでいくことが必要不可欠だ。発展途上国という人種も価値観も異なる場所で、建築を建てることは容易な作業ではないだろう。しかし、TERRAIN architects の建築はどこか、他者でありながら「そこにしかできないもの」を構築しているように感じられる。アフリカ・ウガンダでのプロジェクトを通して、彼らの考える他者との関わり方、建築の在り方を探った。

聞き手=嵩岡、キム

2015.8.25 TERRAIN architects 事務所にて

海外での仕事について

—— 海外で仕事をするようになった経緯はどのようなものでしょうか。

小林 事務所を2人で立ち上げて今年で4年目になりますが、海外で仕事をするきっかけは偶然でした。最初の仕事は、インドネシアの小さな図書室のプロジェクトです。僕が大学院を出た当時、就職も決まっていなくて、お金もなくて仕事もなくて、という状況で。修士制作の打ち上げのときに友人から、「知り合いが海外でのプロジェクトに興味のある人を探している」と言われたんです。僕は学部ときにアフリカのウガンダで一年間NGOの活動に参加したことや、大学院のときに修了制作の一環で西アフリカに行ったことがあったので、友人の紹介でその方に会ったのが始まりですね。インドネシアで日本語学校の先生をしながら、現地でドキュメンタリー映画を撮影して、その上映会をされているような方で。そのときは話をしただけだったんですが、設計事務所に就職して1年くらい経ったときに連絡があって。上映会の活動で寄付が集まって、映画の題材になった人物の母校に図書室をつくりたい、というプロジェクトに声をかけていただいたんです。そのプロジェクトが初めての海外での仕事ですね。海外で、というより自分たちに依頼された初めての仕事でした。

—— 学部時代のアフリカでの経験はどのようなものでしたか。

小林 学部3年生が終わってすぐに大学を休学して、あるNGOに所属してウガンダに行ったんです。建築とは関係のない団体で、一年間どう動くかは基本的には自由でした。「君たちをアフリカに送るから、将来のために自分たちで好きなことをやりなさい」と言う感じで、条件としては生きて帰ってこい、くらいでした(笑)。

初めは現地に溶け込むためにホームステイをしたり、とにかく一年間何をするのか見つけるのに時間をかけていました。行く前は建築のことは頭から離れていたんですが、ホームステイした家がレンガ造りを生業にしている家庭だったことや、現地にも建築学科や設計事務所があることが徐々にわかってきて。現地の人と生活をしてレンガをつくったりしながら、現地の建築学科に紛れこんだり、現地の事務所にインターンしたりしていましたね。そのあと日本に帰ってきてからは藝大の大学院に行っていたんですが、大学院1年のときにまた休学して、西アフリカのドゴン族の集落の調査、実測を6ヶ月間していました。

—— 学生時代にアフリカに行ったことが背景としては大きいのですか。

小林 そうですね。自分で、というよりはアフリカ、アフリカって周りに言われて染められてしまった感じでしょうか。最初ウガンダに行く前は特にアフリカ自体に魅力を感じていたわけではなかったんですよ。でも日本に帰ってきて、『建築家なしの建築』のなどの本を読んで、これまでの建築家たちが集落について研究してきた内容を知るに連れて、アフリカにも、もっと色々



ドゴン族の集落

なものがあるんじゃないか、と思って。それがアフリカのことを徐々に知ろうとしていったきっかけになりました。

—— お二人で仕事をするようになった経緯を教えてください。

榎村 小林とは大学院からの知り合いだったんですが、わたしはアフリカとは全然関係なくて。大学院をでてから、アイルランドに行って一年働いていました。そのとき彼がアフリカで集落調査をしていたので、ヨーロッパから西アフリカなら比較的近いなと思って。ドゴン族の話は以前から耳にしていたので、知り合いが居るならぜひ行きたいと思って、それでアフリカに旅行に行ったのが最初ですね。日本に帰国後はトム・ヘネガン研究室の助手を3年やっていました。外国でおもしろそうなプロジェクトがあれば何でもやりたい気持ちだったし、助手として働きながら実務もできたら良いなと思っていたので、彼からインドネシアのプロジェクトに誘われて、一緒に組むことになりました。

ウガンダでのプロジェクトについて

—— ウガンダのプロジェクトについて教えてください。

小林 長い期間ウガンダで携わっていた「AU dormitory」というプロジェクトが、一期工事・二期工事を経て、ついこのあいだ竣工しました。現地で引き渡して戻ってきたところです。

—— 現地でのコミュニケーションは、スケッチや模型で行っていたと思うのですが、日本と違うところがありましたか。

小林 僕はこのプロジェクトに関してはかなりの日数現場に常駐して、設計監理をしました。榎村も代わりに2か月ほど滞在して監理したこともありました。現場でのコミュニケーションの方法として模型やスケッチは日本でも当たり前を使うと思うので、そんなに特殊なことをしたとは思っていません。図面だけでは伝わらない事を、その場その場で必死になって伝えていました。

日本の現場で大工さんにも、「これじゃわかんねえよ」って言われて必死になって説明することもあるので、そこに関してはそこまで障害を感じたことはないですね。一番大きな違いは、日本の大工さんや職人さんは、積み重ねた経験はもちろん高い技術を持っていること。アフリカだと積み木をしているみたいな感じで始まるから(笑)。でも、僕たちもそうなんですよ、現地の人と同じで。現地で積み重ねた経験があるわけではないので、材料とかをその場で試してみたりして、ある程度大枠の図面はあるけど、想定していた素材が手に入ることの方が稀なので、本当にその素材で成り立つのか、現場の人ができること・できないことをその場で取捨選択しながらやっているというか、現場でつくりながらイメージを形にしています。

—— 素材として、レンガを使用していることが印象的です。

小林 いまのウガンダの一般的な建物は、平屋であれば、レンガ自体が構造として使われています。レンガが雑に積まれて、モルタルもはみだすように塗られていて。レンガがむき出しに

なっているものは、お金ができればこの上にモルタルを塗ってペンキを塗られる予定のものでしかない。彼らはこれを見せるという意識もないし、仕上げのモルタルが塗れてないというのは、お金がない象徴なんです。「AU dormitory」のプロジェクトの発想の原点はここにあって、このレンガの表情みたいなのは実は綺麗なんじゃないかと。

—— レンガについても、日本の規格よりも大きいですよ。

小林 レンガの大きさは、ウガンダの中でも地域によって違いますね。この規格は敷地周辺の一番スタンダードなものです。敷地周辺では同じサイズの木型枠でつくっているの、レンガ自体もそのサイズになります。

—— 現地規格の素材を使うことで、建築のスケール感や、周りとの調和が自然と生まれるということでしょうか。

小林 そうですね。大きさも周辺にあるものと同じだし、レンガ以外も特殊な素材を使ってないので。あとは、現実的な問題として、周辺で手に入らない素材を使えばそれだけ輸送費がかかる面も、スタンダードな規格のものを使う理由です。

—— それは設計段階で決まっていたんでしょうか。それとも現地に行って手探りで決まっていくのでしょうか。

小林 レンガに関しては、初めからその表情を何とか見せたいという気持ちが強かったですね。

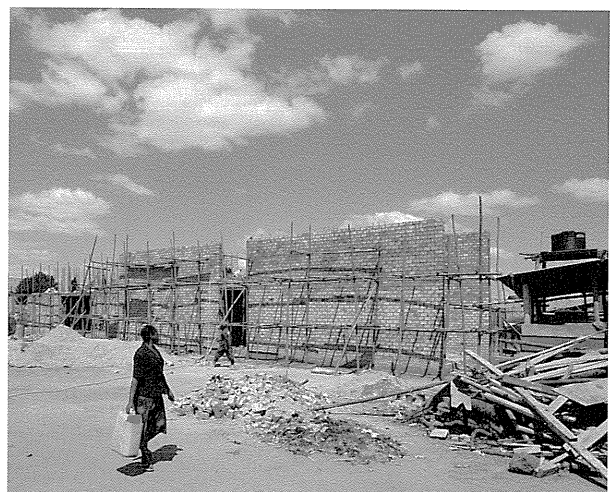
櫻村 この場所らしいものをつくりたかったんです。レンガのテクスチャを活かすこと、丁寧に積んでいけば、「僕たちのレンガでも、それだけで綺麗だ」ってなるといいなと思って。私たちは外国人として現地に入っているの、「新しく良いものを持ってきたよ」ということじゃなくて、「あなたたちがやっていることは格好良いと思います」という姿勢で、最終的な成果物も彼らのものとして出来上がってほしいと思っています。その一つとして今回はレンガに焦点を当てた、という感じですね。



ウガンダの街並み



敷地周辺にあるレンガ造の構造物



現場でレンガが積み重ねられている様子

— このレンガを使うことに関して、現地住民の反応はどうでしたか。

小林 仕上げとして使うことに関しては、最初は理解されませんでしたね。一つひとつのサイズもセンチ単位でちがうんですよ。精度がミリじゃないっていう（笑）。写真ではちゃんとしているように見えるけど、実際に見ると結構石も入っていてぼこぼこしているし、表面にも積んだ人が描いた数字とかも書いてあるし。それを表面にだすなんて、「何でわざわざそんなことするんだ」という雰囲気ではありました。

櫻村 ウガンダは都市近郊なので、都市部の工場で作られたいわゆるファクトリーメイドの部品も届く範囲ではあるんですよ。だから、「そんなにレンガがきれいなら、こっちをつかえば良いのよ」って現地の設計事務所の人にも言われたんです。でも、つくられ方を含めて「地元のレンガが良いんじゃないか」ということを時間をかけて伝えていきました。

— 現地の人も徐々に理解してくれるのでしょうか。

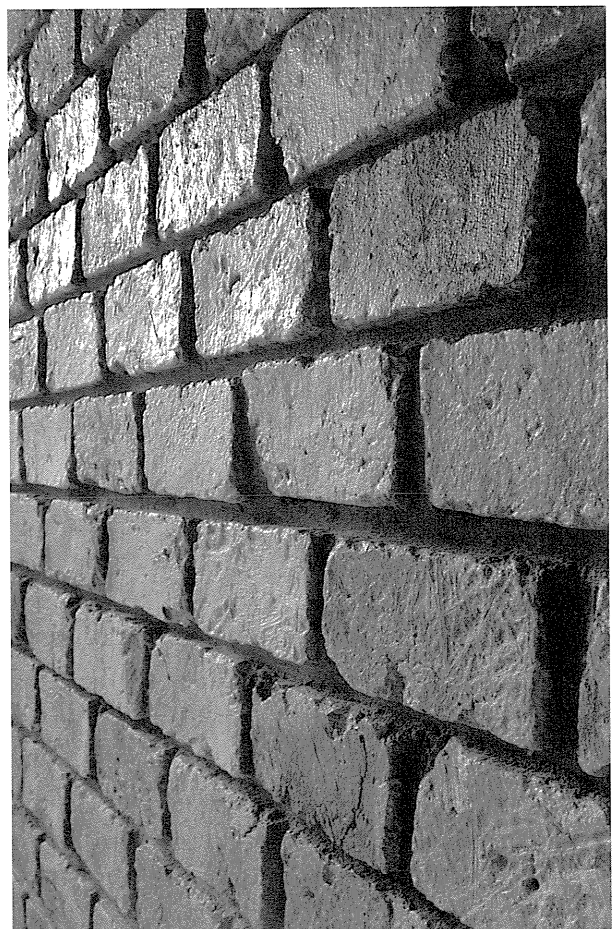
小林 ほぼ完成という段階になって、やっとですね。一期工事が終わるまでは、結構何回もやり直しをしてもらいました。こんな風景になるというのは、僕は想像しながらやっているけれど、彼ら是一つずつ手元しか見ずに積んでいるのでわからないんです。「まっすぐ積む」ということと、「色合いができるだけバランスよく並ぶように、黒っぽいのが固まり過ぎないように」とか、「色を分けて」というのを指示して、うまくいかない箇所は一人一人の職人に伝えていきました。

でも、レンガ積みリーダーみたいな職人が、徐々に僕らの言おうとしていることを理解してくれて、「あいつが思っているのはこういうことだ」というふうに周りに伝播していったんです。だから二期工事は、僕がレンガの色とかについては指示しなくても積めるようになりました。竣工した後に訪問客が来たんですが、「こんなきれいなレンガは、どこかから輸入してきたものなんじゃないか」と言われて、職人たちはとても喜んでいました。

ヴァナキュラーなもの

— ガラスの使い方やプランの構成など、近代的な言語も使われていますよね。「そこでしかできない」ものでありながら「そこにはなかったもの」という印象を受けます。

小林 そこに普通にあるものに対して「もっとこうすれば良いのよ」という要素を設計の段階では考えました。そこにあるものを否定しているわけではないのですが、現地の一般的な住宅はレンガ造で、窓が少なくて暗いです。だから現地の人たちは



現場で積まれたレンガのテクスチャ



木陰で活動していたりして、家の中は寝るときだけしか使っていなかったりもします。室内だけれど明るい光の中で活動できるように、という箇所にガラスを使いました。近代的な言語を使ったり、特殊な建築にしようという意識はなくて、そこにある気候なり、地域にあるものをもっとポジティブに感じられる場所にしたいからです。この煉瓦壁の配置自体も、南に湖がある関係で、南北方向の風が心地良いことがわかって、その風をこの施設を使う人たちが享受できるように決めました。

もっとヴァナキュラーなものを想像していた、と言われたことがありましたが、形式的な「土着的なもの」を目指すのではなく、そこにあるものの中で、快適で居心地の良い場所をどうしたらくれるか、というプロセスで考えています。

櫻村 日本もそうだと思うのですが、かつてつくられていたヴァナキュラーな建築を現代につくることってすごく難しいんです。職人さんの数や、昔使っていたものと同等の材料を集めるのは

非常に大変で。アフリカでも僻地に行けば、いわゆる私たちが本を通して目にした「土着的」な倉庫や住戸は残っているんだけど、それをこの敷地でやるのは再現になってしまうし、住み手にも受け入れ難いんですよ。現地の状況を探っていくと、スチールもコンクリートも身近な存在なんです。だから、形式的な「そこでしかできないもの」を持ち込むことは実は不自然なことで、今回はこの構成が自然だったなと思っています。

国境を行き来すること

—— アフリカの都市化に伴って、さまざまな変化もあると思います。



「AU dormitory」(第一期工事後)

小林 僕が最初にウガンダに行ったのは、2002年です。当時も「AU dormitory」の敷地周辺に住んでいましたが、交通量と人口はここ10年で急激に増えています。緑一面の丘だったところが住戸だらけになっていたりとか。目に見える人口の増加や経済の変化に対して、インフラとか、色々なものが追いついていない、という状況もあります。スマートフォンを持って、インターネットで情報を得て、人の意識は変わってきているように思います。同じような住宅がどんどん建っているし、自家用車、スマートフォンという経済的な豊かさの象徴を求めていて、均一化された価値観だけがどんどん成長している印象があります。でも確かに、いまの日本の都市部よりも人々に「活気がある」という感じはします。

—— アフリカと東京を行き来することで、その差を感じることや新しい発見はありますか。

小林 アフリカに居る期間が長いときは、ウガンダ人の感覚に近づいてくることを自覚することがあります。僕もだんだんウガンダ人マインドになっていく。例えば向こうの現場から、東京とスカイプを使って打ち合わせしたりすると、僕は現場寄りの感覚になってきて、「レンガ一つ積むのにも、こっちは大変なんだよ！」って言ったりすると、榎村からしたら「そこはもっと頑張ろうよ」って言われたりして(笑)。

住んでいる場所で感覚に違いを感じることはありますが、日本であろうと、ウガンダであろうと基本的には現地に居る人の意見を優先して考え方や物の見方を尊重するようにしています。でも、現場に居る方はいろんな状況が見える分悩むんですよ。だから、なぜそれを悩まないといけないのかを掘り下げるようにしています。結局、現場に居る人間の方が、ディテールや部分的なことだけではないまわりの状況をわかっているの。逆に現場から離れていると、客観的に別の視点から考えて解決できるときもあります。

—— 逆に向こうからは、日本で仕事を客観的な視点で見られているのでしょうか。

小林 そうですね。日本では当たり前場面でも新鮮に感じられます。僕らが建築を始めてから当たり前のように使われている施工法や材料でも、実際に現場で見ると、「こうすれば良いんだ」「こう指示すればウガンダの職人さんでも実現可能だな」という風に考えさせられます。あとは、いままで日本の建築が積み重ねてきたものの尊さや、建物が立ち上がってくる過程がよく見えるようになりました。

榎村 あと日本は選択肢が山のようにありますよね。ウガンダで材料を探るときは、選択肢がとても少ないんですよ。日本だと値段から素材からサイズからピンからキリまであって、そんなに沢山の種類が必要なのか、って疑問に思うこともあります。

—— それに逆に不自由というか、制限になってしまうと。

榎村 そうですね。いま一番流通しているもの、一番良いとされているものもいずれ変わっていくし、何が本当に適正なのかを考えるときに、選択肢の多さは、それを難しくする原因でもあるように感じます。

小林 どれを選択するのか、その能力が試されます。

—— 現地の学生についても、東京とは差がありますか。

小林 都心部だけで言うとどんどん東京に近づいているんじゃないかな。現地の大学では、建築学生に教えることって、それこそ使うレンガの数を計算したりとか、職業訓練的なことが多くて。空間とかデザインの議論がなかったのが、最近は少しずつ増えてきている感覚はあります。

榎村 現地の建築学生とは、ワークショップもしました。東京藝大の学生とウガンダのマケレレ大学の建築学生がチームになって移動式のキオスクを設計・制作する、というワークショップです。ウガンダの道端にはインフォーマルな露店がたくさんあって、それは建築的にすごく面白いんですよ。7日間という

短い期間ですが、制限の多い土地で、建築をつくるとはどういうことなのか、そのプロセスを体感することがコンセプトでした。

—— どのようなものができたのでしょうか。

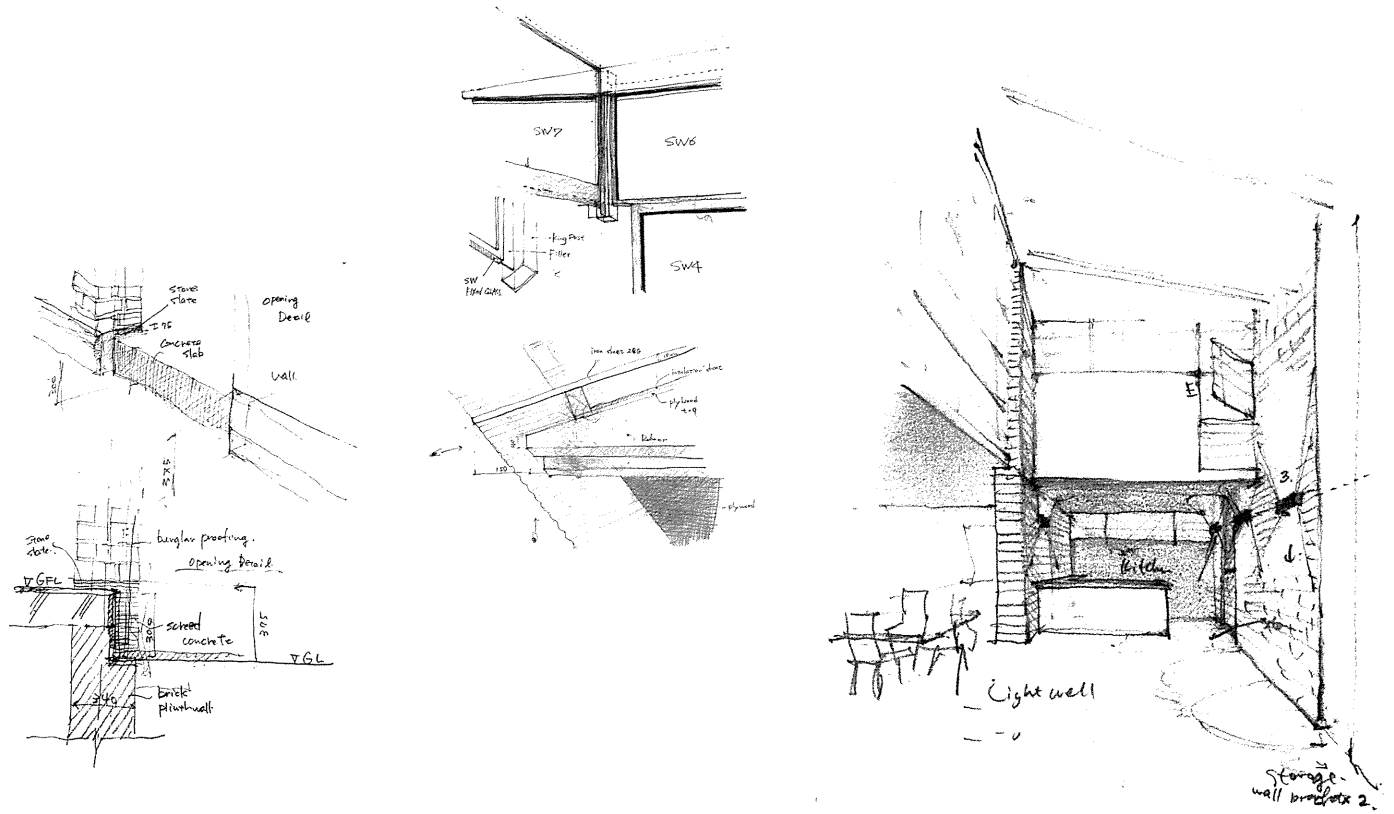
榎村 材料が少なく、道路も舗装されていない状況で、その問題に対して建築的にどう立ち向かうかを試されるんです。その解答としては、日本の学生もウガンダの学生もかなり共通しているな、という印象でした。当然、話をするときもスケッチや模型がでてきて、建築をつくるプロセスとしては「AU dormitory」で感じたことを再確認できました。日本人であろうがウガンダ人であろうが、建築に対する姿勢や考え方に共通することが多いことは、興味深かったです。

「そこ」で何をすべきか

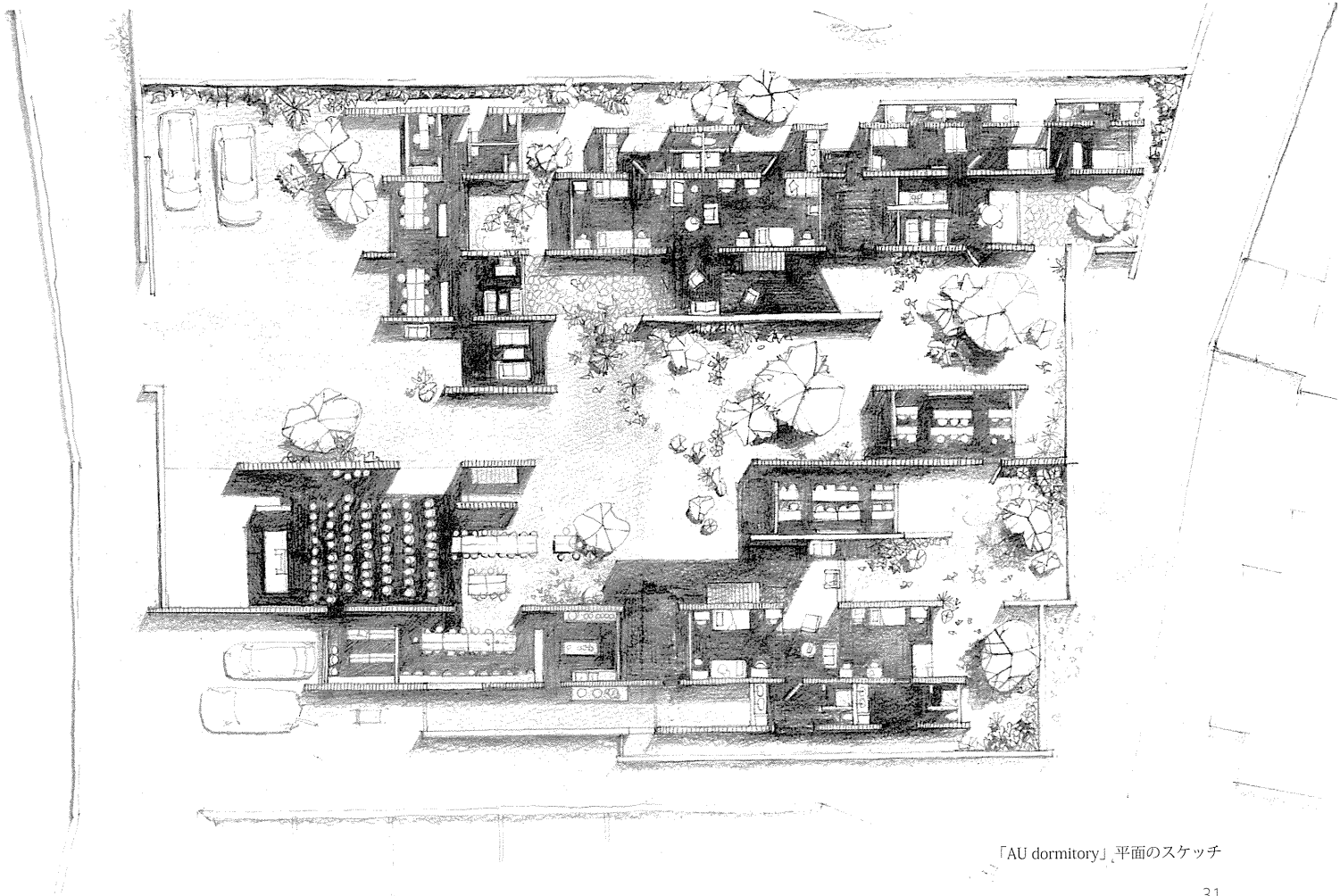
—— 国内外の仕事を経て、建築家として独自のスタンスを持たれているように感じます。

榎村 日本と海外を行き来していると、「そこにしかないもの」には敏感になっていると思います。長く居るとあたりまえになっていることでも、日本ですら帰国直後は外国のように感じて、やっぱり良いな、とかやっぱり嫌だな、と改めて思うことはあります。それは建築だけでなく、食品やサービスや色々なことについて。建築の仕事は長い時間がかかるので、短期滞在で抱く好きとか嫌いという感覚とは違ってはいますが、「そこにあるもの」をどう活かすか、ということに関して真摯でありたい気持ちは一貫して持っていたいなと思っています。新築であろうが改築であろうがそれは変わらなくて。昔つくられたものでもどうにかして活かしてあげたい、ということを考える姿勢はありますね。

小林 スタンスという意味では、僕たちの世代では建築家像っていうのがあまりはっきりしていないかもしれない。いまは建築家の職能がいろんな範囲や領域に広がっていますよね。設計



現場で描かれたスケッチ



「AU dormitory」平面のスケッチ

して、こういうものができます、と言ってすぐ実現する時代でもないと思うし。一方で、ウガンダでも建築家の存在意義について考えさせられることはあります。現場でレンガを積んでいけば家が建つし、現地ではどちらかというデザインや快適さを求めて設計する存在というよりは、現場で工事が悪いことしないかを見張る役として仕事をしている建築家が多いんです。

日本とアフリカの両方において、「建築家って何をやる人間なのだろう」と考えるときに、自分たちの仕事の必要性について悩むこともありました。でも仕事をしていると、はっきりは言えないんですけど、僕たちが何かを見つけて、それを形にすることで状況が変わることが結構あることを特にウガンダでは感じてきたんです。僕たちが何かをするというよりは、客観的な視点を持ちながら、ものづくりに参加することによって環境や状況が変わる事が多いんじゃないかと。そういう視点を持ちながら新しいものをつくり出す役目として、建築家の存在は必要だと思えるようになりました。

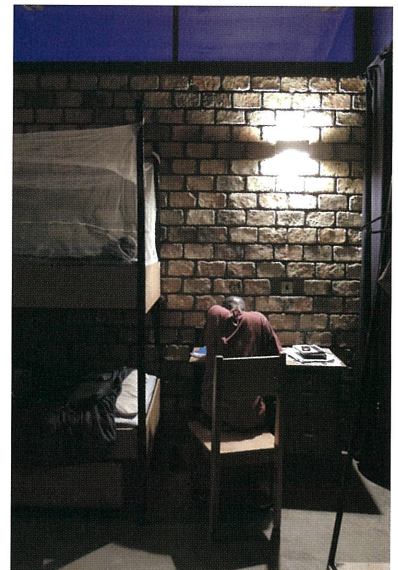
—— 何かをつくることによって、周りに新しい影響を与えていくのですね。

小林 確かに僕らは「作品」をつくることに関してだんだん否定的になっている時代のなかで建築を学んできたし、日本にずっと居ると、その空気に染まってしまっていたと思います。正直なところ、ウガンダのような場所で仕事をしていることで、建築が建ちあがる喜びや、建てたものが周りに還元できる可能性を純粹に感じられるのかもしれない。

櫻村 いま東京藝大の学部1年生を教えているんですが、課題では前川國男さん渡辺仁さんなどの戦前・戦後の建築を見に行っていて、そこで設計する課題にしています。1年生にとっては古めかしい「近代」建築だけど、タイルのごつごつしている感じとか光の当たり具合を見て、空間がすごく豊かなんだ、ということを確認すると、1年生もすごくそれに反応するんですよ。その豊かさや強さについては信じたいというか、歴史の積み重ねによって、より豊かな建築が生まれて良いはずだから、過去につくられたものの中にアイデアがあれば、それはやっぱり大切にしたいです。



「AU dormitory」, ウガンダ共和国



「AU dormitory」, ウガンダ共和国



「AU dormitory」, ウガンダ共和国



「ENDANG BUNKO」, インドネシア

小林 僕は学生のときよりも、実際に建築の仕事をはじめてからの方が建築の素晴らしさや面白さを感じるようになりました。日本では考えられない様な、雑な工事で建てられた建物をウガンダでは目にする事もあるし、現場に居ると、こういうものはこうしないと建ちあがらないんだ、見えない部分でも基礎はこうしないと崩れてしまうんだ、というように日本では見えにくくなっている部分も見ることができます。僕が通っていた武蔵工大や東京藝大は割と実物大のものや大きい模型をつくる機会のある学校だったけど、課題だけじゃなくて、実際にものに触れて「建築ってこういうことか」と気づくこと、そして建築するという行為について考える機会は貴重だと思います。そのためにも、学生とのワークショップはこれからも続けていきたいですね。

自分たちにできること

—— 図面には直線で壁を描かれていますが、現地の施工技術では直線にすることは難しいのではないのでしょうか。



「磯子の家」, 日本

小林 ウガンダでの工事が始まるまでの僕たちの設計活動は、設計図書をつくる過程で、指針というか、背骨みたいなものだけを決めるために、図面を描いているにすぎないと思っています。それは多分現場でずれるだろうっていうことはわかっているんです。でも、図面という背骨がないと、何でそこを頑張るのか、どこが歪んでも良いのかわからなくなってしまいます。どれだけ歪みや誤差を許容できるかわかるように、図面を描いています。図面にある直線を見て「このラインは真っすぐになりたい」と理解してくれば、職人達は精一杯直線になるように頑張る。実際素材のサイズは均一ではないし、職人の技術も違うので、結果的に直線ではなくなるのですが、背骨があるから素材の表情や職人の技術が際立つということがあると思います。

榎村 初めに描いた図面が私たちの指針であり、現地でレンガを積む人たちにとっても、ここからここまですべてを何段でまっすぐにそろえる、という絶対に必要な目標になるようにしています。

—— 変化する状況の中で、図面の果たす役割はとても大きいのですよね。



ウガンダでのワークショップの様子

榎村 現場では予想外のことが山ほど起きるんですよ。途中で材料がなくなってしまうこともあったし、代わりに市場にあって綺麗なのを買ってきたけどサイズが違って、どうしよう、とか。「早く言ってよ！」って（笑）。「部材が厚かったのでここガラスにかぶっちゃいました」って後から言われたりすることも結構ありましたね。

小林 だから図面とは別に、毎日現場でスケッチを描かざるをえないんです。指示をするために描くというよりも、自分たちも現場で描きながら考えていますね。ここまでつくってしまったから、それを壊さずにどうやって使おうかというのを、現場を少し離れて、自分たちで考えて。これなら納まるかもしれない、というようにスケッチしています。図面を描いているだけでは気付けない、考えられないことは多いなと思います。

—— 設計されている上で、お互いのイメージはどのように共有されるのでしょうか。

小林 できるだけ設計段階で最初になんとかこういうのしよう、というシーンみたいなものを共有するようにしています。現場のなかで、そのシーンを常にお互いが積み上げていくイメージですね。でも、実際できあがってくるまで二人のイメージが同じなのは、わからないところもあるんですが。

—— そのシーンというのも、スケッチで共有されるのでしょうか。

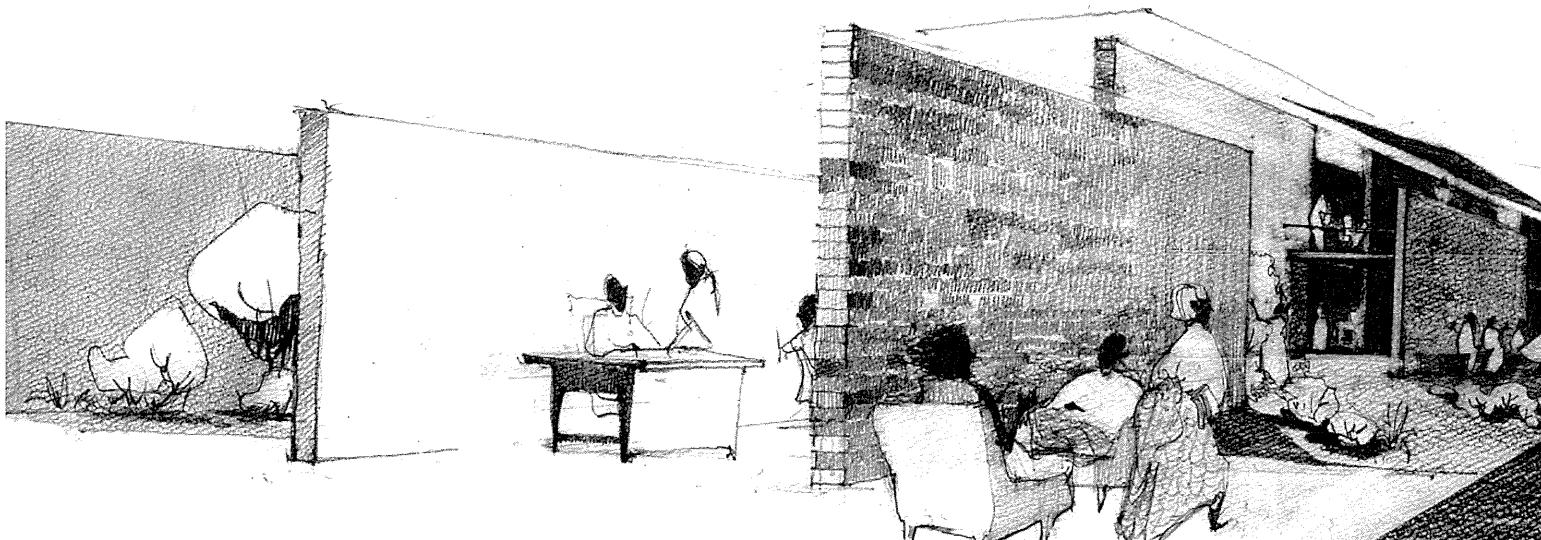
榎村 スケッチだったり模型だったり、色々ですね。でも、絵を描くことは大切にしています。時間をかけてじっくり観察しながら描くと、後から見てもそのときの周りの状況を思い出すんですよ。その場所が涼しかったな、とかあんな音がしていたな、って。

—— 記憶が痕跡として残っていくということですね。

小林 それはウガンダのプロジェクト全体についても言えることです。レンガの歪み一つ取っても、「こんなことあったな」という記憶を想起させるような、人が実際に手で積んだ痕跡が残っていくんです。痕跡ってネガティブにも捉えられるし、汚いと思えば汚いけれど、それがどう良いかを感じられる余裕があると、考えも広がるんじゃないかと思います。

—— その場所で起こったことが痕跡として残されていくのは、建築の本質であるようにも思えます。

榎村 基本的に設計は2人ですけど、実際に建てる時には現地の設計事務所のパートナーがいて、住み手がいて、近所の文句言ってくるおばさんもいたりして。2人で考えているという



感覚よりも、最後にできるまでわからないというか。現場でできていくものなので、できたものそれ自体が誰によってつくられたのかを考えると、色々な人が関わっているという認識は結構大きいですね。

—— さまざまな要素の中の1つとして設計者がいるということですね。ある意味で他者として建築に関わっていると。

小林 ウガンダのプロジェクトに関しては、建築に関する規則も基準も曖昧なので、色々な人が色々な事を言って設計が現場で変更されることがよくあります。最初は余計なこと言わないでほしいと思っても、実はそれがグッドアイデアだったりすることもある。だれかが思いつきで出した意見で、変更する状況になることもあり、その意見が建築のプロのものだとも限らないし、それが結果的に良いこともあります。

—— 目標点に向かって直線的に進めるのではなく、まわり道をしてつくり上げていく、ということですね。

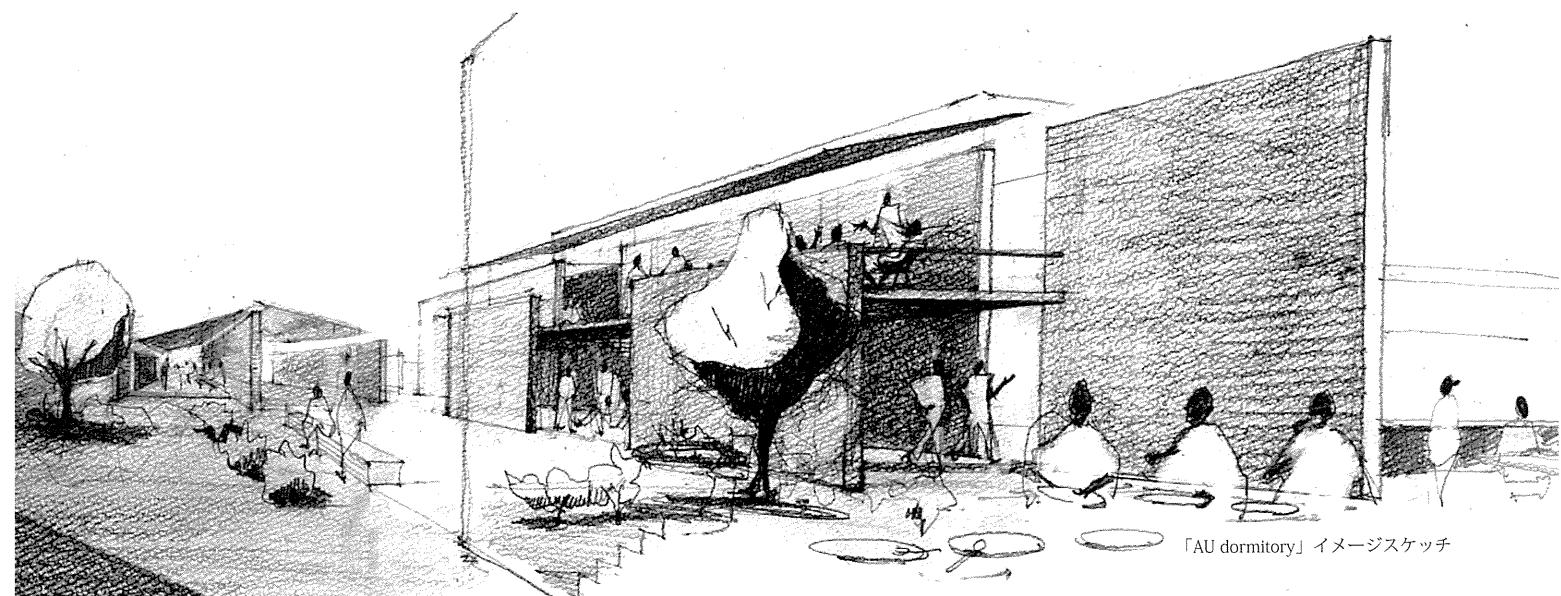
小林 直線では絶対に無理ですね。まわらざるをえないです。でも、頭ではわかっているんだけど、どこかで直線でいけると思ってしまう自分も居るんです(笑)。図面を描いてしまうと、それを目指そうとして、実現できないことに悩んでしまうこともあります。でも、結局はまわり道をしたことによって

考えが深くなっていくというか、それを良いと思わないとやっつけていけないですね。もしかしたら、僕らは日本でのキャリアがあまりないので、そういうものだと思っているだけなのかもしれませんが。

—— この先、将来的なビジョンなどはありますか。

小林 アフリカにこうやって縁ができて、日本で仕事をするにしてもどこで仕事をするにしても、いまは自分たちにとって大事なものを見つけて、積み上げている最中な気がします。そういう意味ではどういう場所に居てもできるというか、敷地にはそれぞれの個性があって取り巻く状況も違うので、その場に身を置いて、場所をじっくりみて、これからも仕事ができると良いなと思っています。現地の人たちと一緒になにかできる機会は自分たちでつくっていききたいですね。やっぱり、みんなで建築をつくるのは楽しいですから。

- 終 -



「AU dormitory」イメージスケッチ